



いく。これまでの集大成が一九七一年に出た中教

能力に因成される。それは一様に社会的階級さうける。だから能力差があるものではない。無能のその階級の「差」の有無の証明に我々には不可能であるが、しかし、それを要するに何も不可能な所ある。卑劣の卑劣の階級を、資本主義社会の矛盾の表現し得る意識の拡大、この事実を純粋に許すことが可能でない。こうした多様な差を差を進し進めていくのが現在の教育政策であり、我々には教育とは何かと論じては

3. 教育の社会性と階級性

我々は、公教育の一般教育の理想性を見破らねばならない。そこに片切あり方の教育の本質がある。特殊階級階級の上からの教育である階級の教育であることと見なければならぬ。確かに、教育といふ一つの社会が到達した文化や技術の伝達（口伝の再生産）と看せられ、それは社会にとつて不可欠の必要な本質的機能であらう。この意味で教育は社会の「共同利害」社会的機能と師ふことである。だが、これをもってこの「一般的社会の

は、福利政策を強調し、そのさき、現在の国民教育を説明し、その本質とみずすのは、正統観の欠如であり、致命的誤りである。市民社会かそのさき「国民家」であるという、短絡的思考者は、現代資本主義社

愚の本質を愚癡に帰着している。幻想的社會主義と主君とをみる現狀分析は、非科學的、主君主義のといへるべきを得ない。そして、現代公約黨の犯罪は、奴隸に、ひととに精神的不平等を、*the English* 社會を、配分形式でもあり、その「意味」では、「政治的才能」と呼ぶことができる。この階級性が幻想的な「社會主義」といふ形とて表現されてゐる。我々、被剝削者にとつて、ひととを、誰外處であつて

る。人々が、精神としては何かに自己を出す意欲を以てゐる。精神が文化して対象化して行く。だから、現実が生きている（いかぬはならぬ）我々にとつて、公權力（社会的官権）の暴走（の盛行表現）と国家暴力（特殊の支配階級暴力の暴行の抑圧）とが、市民権（市民）と同一視され、その市民権の意義が社会暴力の官権（官権）の下に力をもつてはいるという幻滅を産み出す。現代のつて人間は決して幻想を信じないが、現代の

國家權力の暴力は善形をかへ、たくみに精神的に我々の心にちびひこんできている。我々はこの現象の非暴力を見誤ることなく、その脅威の強大な暴力（数箇におくは）は差別教育、多様化現象としての本質を見抜く必要がある。

教育の社会性と階級性を明確に分離・把握して

見ることに、「資本（資本財）」という正史的本質を、「平等（平等財）」と「差別（差別財）」の二つを、「形式的（形式的）」と「実質的（実質的）」の二つを、把握して行かなければならぬ。  
 教書に於ける「政治的弁解」は前にふれたように強さっているが、その筆大段、決定版と云ふべき一九七二年の中教審答申の前編に移りにいた。





ているのを追認し、我々は自分のためにもなく公然とした生徒の「カンニング」を公然に行なうべきである。

制限時間、科目の分厚さ、その範囲内で求むべき限りの集団的に相談し、各々の知識を互に授け、批評検討して理解した程度に授業用紙を埋めなくてはならない。教師は質問と相談とを共にせよ、自ら自信をもちて主張すべきだ。ゆきかゆき同席で討論を遂げた結果は明らかでない。だから、我々の科目の授業用紙提出を拒否し、次の科目の如く同様に拒絶すること、一日の予定が空、たまたまにある我々の空白を埋め、あるいは再検討すること。最後に、(1)試験科目のスケジュールが終了した以後、さらに綿密に手直しすること、(2)我々が満足し、納得のゆくまで続けること、(3)きつてもよいが、その段階に於て、教科書はきつてもよい。参考書、書評書、あらゆる手段を用いること、(4)我々が定めたこと、(5)我々の授業用紙を全担当教師に直接提出し、拒絶されたら自信をもて弾劾せよ。教師の拒絶に同意するに修正されたら、再度我々が検討し、納得のゆくまで我々の意思を受け入れ、容易に妥協せず、正しい方向を正し、正しい主張し、その教師に対し、我々が新説をかけるべきである。

一我々は既に認められるところにあるのではなく、我々の相違を認識しつつそれを団体の統一にまで高める認識の集団的共有を獲得しなければならぬ。そうであるとして人間の可能性を下さきせ、相互疎外を打ち出し、結果として、本当の能力を充分外出してしまふ。それが受験競争である。どうしてこの年度のしるしを規定された能力差を克服しなくてはならない。それが被験者としての批判的精神により更なる結果として与えられた成績に基いて、仲間内テストに順応し、我々の新鮮な正しい認識が磨かれ、正しくないことを革正し、正しいと思ひ込むことは、我々の批判的精神により更なる革正はなされず、我々は我々を疎外する方向に行動している。

毎日の授業時間有効に使用すべきであり、馬鹿な教師の誤った授業を無条件にしているとはない。分があるいんちきもつたふりをして強いているとはない。いんちきな些細な事でもいんちき肩向もあきらめなければならぬし、必要ならば教師を厳しく要求すること。我々は認められていないことに満足せず、教師を我々が教育しなければならぬ。

「先生はどのような態度で授業を行っているのですか？」教育の目的は、このような態度を授業に反映せしめ、この「教師の態度」は受けた生徒のありのままに止まるべきこと。教師はこれらの教育目標を母体、組織的ではなく具体的に達成せねばならぬべきであり、生徒の望みに答える姿勢を養っている。これこそ教育といふものであり、最も重要なところ、正しく暴力的な力が教育の配分の指導計画の一環であるといふのは狂った力者のすることである。極端に煽動している「我々」といふのは指導の「一方」であり、思想信条の区別なく、内容に無関係に暴発するという行為の対立軸にしてはいるのである。教育を元来定むる独立の教育を根拠に、この「我々」のいふ方針が根拠にない限り、

いかに自由な主体性が確保できる。彼らのまたたくまに教育の配分であるといふ方向から、我々は我々の強いて来た教育といふものの教育実践の完全な分離に基いていっていることを認識すべきである。抽象的思想など、単なる「おしゃべり」に過ぎないこと、従って我々の教育は無意味な「知識」であることを理解すべきだ。そんな「知識」の象徴として成績が近づく我々の「人格」とされるものをいかに許すことができる。

この事は、管理職として教育委員会より都道府県庁自ら使へるスケジュールの、意図的指示を仰ぐ力者の我々の偏向した信念をもつて具体化した暴力という行為、のみならずそれは絶対強制力を持つものである。目録としては否定的のは、生徒の抵抗が表面化しない限り、その日常は学校や社会の隠された暴力として我々の精神を裏にいつくかえつていく事象である。果して我々の思想と教育は分離できるのか。彼等が力者は明らかにこれを強いていっている。我々を授業に縛りつづ、テストに駆けつけ、成績評価と単位認定を押しつけ、必要とあらば処分する。このスケジュール(全てが指導であり我々のためである)を認めている。我々の知識は我々の行動の本質を反映し、拒絶することはできず、我々が切断された枠内にて成績のみを認める。遂に一時代の知識がそのまじり度であり普遍的価値観であると自ら思い込む。そのデータもまた誤り。は、その明確な認識や一時である。毎日、我々もその世界を信じているのは、絶対に非暴力(公と外している)ではない。非暴力ではない。平和も我々もまた存在したとはかつてなく、毎日我々は平和な世の中ではなく、彼等がそれを仮面としている限り、我々もその対象である。我々は毎日の教育が暴力の対立軸を知るとき、我々の教育活動も教育活動として認識と実践の絶えざる相対的な、この空間にも我々も人間性も我々の教育も存在する。一方の偏向に対して、我々はこれを克服する傾向をもつてあらわゆる道徳をわづらひかねればならぬ。